

ばってん ウーマン

事務局 津田尚美

編集 岸本桂子

「女のノート3年」

再び発行します！

3年前「これは翼の一年目を
終るに二年目、三年目の計画をた
めたの著者と時間をしかりかん
で下さい」というメッセと共に
13日の会では「女のノート3年」
と「女の会」を合行しました。
その時「女のノート3年」は、
作り続けていくことを約束しまし
た。9月25日（一九八〇年一
九八一年度）版が、大まかに
内容を共に、以前のノートを
踏襲し、一冊改訂を加え、二部
出来上がりしました。

表紙千二百円、送料一冊二百円
郵送の場合、普通為替にて送料
共に事務局までお申し込み下さい。

津田尚美

尚、好文堂本店、スエーデン、童話館
にも置く予定です。

女が働くこと

後藤ヤス子

最近では、カルチャーセンターやスポーツク
ラブが、どこにも盛況で、専業主婦も、
三食昼寝付きといわれることなく、
いきいきと優雅に暮らしています。よく
「習いごと」に時間を費やせぬ職業婦
人は、時々羨望のまなこで眺めていま
す。ところが、男も女も「人間はなぜ
働くのか」ということについて考え、
経済的理由だけでなく、働くというこ
とは、人間の内的な欲求であり、本能
でもあると思えます。ただ、として、
食べ物やあてがわれるだけでは、決して
楽しくない。「社会に出て働くこと」は、
いろんなしぶさがかかるが、七つの海が
見渡せるマストになりたい（主体的に生
きたい）という話を思い出します。
働くうえでの種々の障害を乗り越え
て、はじめて人間的にも成長するし、
心の張りも得られます。

夫の収入によりかかっていた専業主婦は、
夫の死や離婚に直面すると、生活を
維持していくだけの収入が得られるよ

うな職場は、なにかかすくにはみっかりません。心ならずも福祉に頼らざるを得ない家庭も現実にも多くみえます。

「婦人よ家庭に帰れ」とよくいわれていますが、このことは、ひいては女性の生きる権利を奪うも同然であります。もし現在自分の能力を活かすことの出来ない職場であつても、いつかは自分の能力を活かせるよう努力し自己主張しながら、決して職場をやめずに働き続けてほしいと思います。そして絶対、人を羨ましがらぬ主体的な生き方をしていきたいと思います。

専業主婦は 私の生き方

花房知子

なにかにつけて、自分の身分を明らかにするのには、職業欄というのがありますが、専業主婦の私はいつもこの欄が空白である。かつて、そこに「学生」と書いたように、いま「主婦」と書けば事足りるような気がするが「職業なし」の我が身は社会的には

まことに不安定な身の上であるようだ。

一般に、「仕事をしている」とことで、あるいは「職種」でその人の全人格が推し測れる訳でもないのだが、人を語る時、どうしても「職業」が不可欠であるのは事実である。そういう意味からしても主婦は低くみられがちなのだろうか。生き方として「仕事」があるとするれば、「私は、あえて仕事はしていません。生き方として子育て（面オ、一オ）に専念しています」といいたい。

家庭と仕事を両立させることは、子育てに要する時間とエネルギーを考えると、現行の労働条件では無理だと思うからである。「育児」というのは、ただ子供の世話をするだけでなく、子供とどことんつき合う、遊ぶ」ということだと私は思っている。そしてそういう親子の触れ合いから、はぐくまれる心が、人間形成の基礎になるものだと思うので、保育所などに肩代わりしてもらおう訳にはいかず、ましてや子育てを通じて大人の中に育っていく優しさ、いたわりの心など、自分が育てられ、面を考へると、この育児という大事業に母親ばかりか、父親も専念してほしい。

位である。それ程、育児は、時間とエネルギーをかけてかけすぎることはないと思う。育児にだけでなく、家族との触れ合い、地域活動、ライフワークなど、仕事を持てば犠牲になる部分が多い。自分の人生で、何を大切に思うか、限られた時間、限られた体力、限られた能力ならば、何がしたいという事は、「何を犠牲にできるか」ということで、何事においても二者を両立できるとは思えないのである。

しかし、「女も経済的自立が必要」なので、その部分を犠牲にしている私は、夫に寄りかかる半人前だといわれようである。もっとも資本主義のこの世の中、金銭に換算される仕事ばかりが労働だと思われがちであるが、先頃、読んだ本の中に、「シンドウワーク」という言葉を使って、賃労働が実は支払われたいくさんの「労働」によって支えられているといっているが、働く男を支える主婦の家事労働は、そのシンドウワークの典型であり、その他、通勤も睡眠も私達がやっていることは全て明日働いて賃金を得るために必要なシンドウワークだといえるというのだが、私

には非常に強い言葉であった。こう考えてみると、専業主婦の私も賃金労働に「役も二役もかかっているわけだ。実収入を得ないにしても、全面的に経済的自立をしていない」ということにはならない。ただ問題なのは、理論上はともかく、現実の問題として、夫に万が一の場合、シンドウワークではすまされないもので、まさかの時の準備はしておかなければならないと思う。

人には、それぞれの生き方があり、それが尊重されるべきだと思うが、仕事至上主義で、大切な人間関係や子育てを片隅に追いやったのでは、勤勉は必ずしも美德ではない。願わくば、働く父親も母親も生活領域のための時間をもっと確保し、男女ともにバランスのとれた生活をしたと思う。

婦人問題テレビ講座 あなたへ……
明日のおんなのために
NBCテレビ毎月1月曜日AM9時～10時
第一回 男子厨房に入るべし

♡九州朝日放送制作

一九八〇年六月二十八日、月曜日
19時15分〜20時

「キッキング・ドリンカー」のテーマが送られてきました。

増え続ける女性アルコール中毒の周辺

他の女性問題同様、「主婦」や「家庭」の問題を、キッキング・ドリンカーを通じて現代の主婦的状況の問題としてとらえた作品で、いろいろな人が、いろいろの機会に、女の問題をとり上げて、情報も流して、世の主流派の性(男性)差の理解のための基盤づくりをしておかないと、大切な問題の所在さえ気付いてもらえない。九州朝日放送の放送記者、菅原暁子さんは云います。

彼女が、「シングル」のすまい方の一つの形として、最低の家事、家庭機能を、食堂や大浴場、娯楽室、ロビー等の共通部門で、又医療機関との提携、ホテル機能を備えることにより代行した、西日本で初めての中高年マンションに転居したばかりのこと、皆さん見学に行きませんか。

△テーマ貸出しは山岸本△

♡

7月例会で

働く女性と専業主婦の接点を求めてと題しての座談会を行いました。

ともすれば、分断され、敵対関係になりがちな働く女性と専業主婦の間に共通項を見出していくことの必要性を再確認。それは、男は仕事、女は家事、育児、性役割割社会で、男のエネルギーの全ては、仕事に向けられている今の世の中で、男性のあり方を問い直すことではないのか。子どもを育てる時に、行政に対して、保育所の数や保育時間の延長を云う前に、男も女も、子育てにもっと積極的に関われる時間をかちとる方向へ運動をすすめるれないだろうか。と子持ち女の視点で労働をどう直せば、男も女も共に人間らしく生きられるか。と思うのは、私の独断でしょうか。このテーマでの話し合いで今更とつかみ合っていないものを感じたのは、ひとつには、労働のとりえ方(賃金、労働と無償の労働)として、子育ての質と量の問題が大きな課題として残されたからでしょうか。(山岸本)